

□原著論文□

我が国の女子殺人受刑者に関する研究 —家族機能・パーソナリティ・発達障害の傾向を他罪種と比較して—

平間 さゆり¹ 牛木 潤子² 小畠 秀吾³ 秋葉 繭三⁴

抄 録

近年、男子の殺人事犯は減少傾向にあるが、女子の殺人事犯には変化がない。殺人事犯には男女差があり、女子殺人の被害者には親族や配偶者が多く、情動が主な動機となっている。女子の殺人事犯の数は少ないためあまり研究されていないが、家族や近親者を対象にしていることから、本研究において、女子の殺人事犯を家族機能の側面から検討することとした。家族機能以外にも、犯罪に影響を与えるとされる発達障害（ADHD）と人格傾向（境界性パーソナリティ障害：BPD）に着目し、女子受刑者（殺人以外の他罪種を含む）を対象に家族機能・BPD・ADHD 傾向について調査した。その結果、女子殺人事犯において、ADHD 傾向を持ち、家族の情緒的絆や適応が不良であると、自己否定し見捨てられ感を抱き、他者が信じられず対人関係が困難になることが示された。よって、これらが女子の殺人事犯の背景要因の1つになると考えられた。また、女子殺人事犯のみに、年齢の高低により家族・ADHD・BPD 傾向全てに差異がみられた。

キーワード：女子殺人事犯、家族機能、BPD（境界性パーソナリティ障害）、ADHD（注意欠陥/多動性障害）

A study of female inmates charged with murder in Japan —Comparison with other criminals from the perspective of family functions, personality, and developmental disorders—

HIRAMA Sayuri, USHIKI Junko, OBATA Shugo and AKIBA Mayumi

Abstract

Recently, the number of male murderers has been decreasing. On the other hand, the number of murderesses has not changed. There are sex differences in murder cases. Many female murder victims are relatives, or spouses, and main motives for murder are often emotional reasons. This study examined female murder cases from the perspective of family functions. Moreover, female inmates charged with murder and other crimes were examined focusing on their family functions, as well as attention-deficit/hyperactivity disorder (ADHD) and personality, including borderline personality disorder (BPD), which are considered to affect reasons of committing crimes. The results indicated that murderesses with ADHD tendencies, poor family ties, and maladaptation tended to deny themselves, have the feeling of abandonment, are unable to believe others, and have difficulties in interpersonal relationships. These factors are considered to lead them to commit murder. Furthermore, age differences in family functions, ADHD, and BPD were observed only in female inmates charged with murder.

Keywords : female inmates charged with murder, family function, borderline personality disorder (BPD), attention-deficit/hyperactivity disorder (ADHD)

受付日：2015年10月20日 受理日：2016年3月7日

¹国際医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 保健医療学専攻 医療福祉心理学分野 博士課程
Division of Clinical Psychology in Health and Welfare, Doctoral Program in Health Sciences, Graduate School of Health and Welfare Sciences, International University of Health and Welfare
h-four@agate.plala.or.jp

²福島刑務所

Fukushima Prison

³国際医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 保健医療学専攻 医療福祉心理学分野

Division of Clinical Psychology in Health and Welfare, Graduate School of Health and Welfare Sciences, International University of Health and Welfare

⁴筑波心理科学研究所

Tsukuba Institute of Psychological Science

I. はじめに

平成 26 年版の犯罪白書では、日本における殺人事犯は減少傾向にあると報告されているが、平成 23 年までの約 30 年間の女子の殺人事犯者は、報告された殺人検挙人員の約 2 割前後を推移し、男女比としては女子の殺人事犯は増加傾向にあった¹⁾。これは、男子の殺人事犯は減少しているが女子の殺人事犯に変化がみられないことを示している。

女子犯罪においては、暴力や殺人事犯は犯罪事犯全体に比して少ないため、女子の殺人事犯についての研究報告は少ない。女子の殺人事犯においては、1980 年代から嬰兒殺が著減状況にあることから、岩井²⁾は、「より重たい態様の女子殺人事犯が増加していることが窺える。また、近年女子の放火や強盗も増加傾向にあり女子の重大犯罪は増加傾向にある。女子高齢者の窃盗事犯の増加と重大犯罪の増加は、女子入所受刑者の著しい増加の背景要因の 1 つと推測する」と述べている。女子受刑者の増加や女子犯罪の変化が考えられる現状を鑑みると、女子の重大事犯を検討することは意義があり、どのような事象が女子の殺人事犯に影響を与え、要因となるのかを検討することは重要と考えられる。

我が国の約半世紀の女子殺人事犯における研究概要を簡略すると、1980 年頃までは女性特有の月経や精神遅滞による生物学的要因の影響があるとされていたが、その後には、そのような研究はみられなくなった。また、近年までの一貫した要因では、情動が犯行動機の上位を占め、被害者のほとんどが家族や親しい者となっていることが示されている。このように、女子の殺人では情動が犯行動機となることが多く、感情が高ぶりやすい人格特性と家族関係の関与が推測される。

犯罪と家族との関連についての報告では、日本における平成 23 年度の殺人事犯被害者の親族率は 52.2%、面識のある者と合わせると 87.8% であった。家族間などにおける親しい者との関係により日常的な相互作用から殺人が生成される独特な形として、中村³⁾は、「見えない監禁状態（心理的な拘束）」、「逆転した視点（被害者が加害者の視点を内在化）」、「被害者の生存戦

略としての関係維持」、「俺ルール」の存在」、「家族の秘密を持ち出すことの禁止」、「加害者の被害者意識」、「問題を作り出す加害者」、「被害者の自己犠牲者化」、「被害者の無力化作用」等があると述べている。このように家族間には様々な問題があり、その中には、家族成員の人格の問題や身体的障害・発達障害などの問題も窺える。

一方、戦後の我が国における女子殺人の特徴として広瀬⁴⁾は、既婚の主婦が多く、被害者第 1 位は姑であることをあげ、結婚後の家族制度により犯罪が促進されていると述べている。1970 年代では久我⁵⁾が、女子犯罪の家族の特徴として、経済的に困窮し、学歴が低い傾向にあり、積極的意志ではないものの一人になるのが心細くて婚姻生活の継続を望み、社会的弱者のような状況であることを報告している。さらに、岩井⁶⁾の 2000 年代の研究では、継続している夫の暴力や精神障害・非行などで何歳になっても子供を抱え込まねばならない家庭の悲劇や、認知症などによる親や配偶者の介護疲れが殺害に至ってしまうことが特徴的であると述べている。このように、年代により多少の差異はみられるが、家族の問題が殺人などの重大な女子犯罪と関連していることは続いている。今後においても家族機能が女子犯罪に関連することは推測され、時代やライフスタイルの変化に伴った現在における家族機能と女子犯罪、特に殺人についての関連性を調べることは重要と考えられる。

次に、犯罪と関連の深い人格傾向として、反社会性パーソナリティ障害などがあげられる。相手の行動を悪意あるものと受け止める認知の偏り⁷⁾や犯罪を行わないように自己制御する能力の欠如した自己統制の弱さが犯罪を生じさせる要因⁸⁾ともされているが、これらは境界性パーソナリティ障害（以下 BPD と記す）の特徴に通じている。BPD には、家庭内の役割や規定が曖昧で、家族関係に怒りなどの激しい感情があることや、母親の養育態度の一貫性の欠如や過干渉が関係しているとされている^{9,10)}。また、幼少期における性的・身体的虐待の既往は、自傷行為・解離症状・他害的暴力行動などの重篤な病態者に高率に認

められ、幼少期における虐待やネグレクトは、後年にパーソナリティ障害を発症する確率を4倍高めるとJohnson et al.¹¹⁾は述べている。

また、犯罪と家族の関連で言えば、覚せい剤事犯・窃盗常習犯・放火犯では、幼少期から成人になっても養育者や配偶者などから身体的・性的・心理的な虐待を受けている者がいることが知られている。これらの者は、自己評価が低いために逃げずに怒りを抑圧し、生活に耐えて過剰適応的に日常を送る。それが何かの拍子に、過去の外傷記憶を賦活する事態に遭遇すると感情の爆発や重篤な解離状態を呈し、見捨てられ不安から行動制御が困難になり、刃物による犯罪や放火に至り、子殺し、または、配偶者・恋人などに対して衝動的な暴力に及ぶことがあるとされている¹²⁾。

家庭の中では、虐待だけでなく様々な問題があり、家族間の情緒的な絆の有無や家族が適応的であるかなど、家族機能は重要とされているが、これまで、殺人事犯において、家族機能の問題とBPDの関連性についての研究はない。女性の比率が高いBPDにおいて、女子殺人事犯の家族機能とBPDの関連性を明らかにすることは、女子殺人の背景要因を知るために重要であると考えられる。

一方、殺人を犯す要因を家族や人格傾向以外からみると、衝動性が関与することがあげられる。感情が高ぶることにより、衝動的に殺人に至ることもあるが、生来的な要因である発達障害の1つ注意欠陥/多動性障害（以下ADHDと記す）の影響もあると考えられる。ADHDとは、脳機能の異常に起因する、不注意、多動性、衝動性の3つを特徴とする障害である。そのうちの衝動性は、前頭葉における行動抑制機能の障害とそれに関連する実行機能（注意の統制、行為の持続、適切な計画性など）の問題とされ、将来の目標遂行のために目の反応を抑制できないコントロールの障害である¹³⁾。生物学的な視点からのADHDの研究では、脳の側座核は報酬の期待や知覚を担い、視床は報酬の感受性に関与するが、ADHD児はそれらに問題があるとされ、低い報酬を感じる事が健常児に比べて有意に低いと友田ら¹⁴⁾により報告されている。よって、

今後のために一見その場を我慢するなどというわかりにくい報酬は、ADHD傾向が高いと感じにくいことが考えられ、目の大きな事柄に反応しやすいことが推測される。

また、非行・犯罪の視点からは、ADHD児の一部が、反抗挑戦性障害から素行障害になり、その一部が反社会性パーソナリティ障害となる破壊的行動障害マーチが報告されている¹⁵⁾。家庭内の葛藤や凝集性の低さなどの問題を抱えるADHD児が非行に至るとし、素行障害がADHDに合併しやすいのは、衝動性や抑制困難により自尊心が低下することのほかに、家族との愛着形成がうまくいかないケースが多く¹⁶⁾、ADHDに虐待環境が掛け算になると、非常に高い割合で非行に至ると述べられている¹⁷⁾。

しかしながら、愛着-トラウマの問題は、子供の感情の自己調節を阻害するため、不安からくる落ち着きのなさ、注意の問題、衝動性の高さや易興奮性は、ADHDの診断基準と同じ行動特徴となると奥山は述べ¹⁸⁾、虐待などの被害体験がADHDの診断基準と同様な行動を引き起こしたり、脳の器質に影響を与えることが示唆されている¹⁹⁾。発達障害・器質・情緒・非行の問題はそれぞれ複雑に絡んでいるが、これまでその多くは男子の非行や犯罪についての研究であった。一方、女子のADHDの研究はまだ少なく、事例の少なさから非行や犯罪における研究はさらに少ない。女子に多いとされるBPDと研究の少ないADHDの関連性を環境要因である家族機能の視点から調べることは重要である。よって、本研究において、女子殺人の背景要因に家族機能・人格傾向・発達障害が、どのように関連するかを検討することとした。

II. 目的

女子殺人受刑者の家族機能とBPD傾向・ADHD傾向の関連性を他罪種との比較を通して検討する。

III. 方法

A刑務所で平成25年6月に実施した質問紙調査への回答に同意した女子受刑者468名のうち、罪種が不明瞭または欠損値がある者を除いた窃盗・覚

せい剤取締法違反・殺人・詐欺・粗暴犯(強盗, 放火, 傷害) 272名(平均年齢46.4歳, $SD=13.7$)を対象とした。使用尺度は, 家族機能を測定する「家族機能測定尺度: FACES-III(立山²⁰⁾: 20項目, 5件法)」、BPD傾向を測定する「ボーダーライン・スキーマ質問紙: BSQ(井沢²¹⁾: 20項目, 2件法)」、ADHD傾向を測定するためにハロウェルとレイティの成人のADHD診断基準を基に作成した「ADHD傾向質問紙(Hallowell and Rater²²⁾: 17項目, 2件法)を用いた。本研究では対象者が成人であるため, ADHDの行動的な側面だけではなく, ADHD者の生きづらさも考慮されているハロウェルとレイティの診断基準を使用した(また, この診断基準は20項目あるが, ADHDの状態像とはあまり関係のない項目を除外し, 17項目として使用した)。

なお, 本研究では, 倫理上得られる情報に限りがあるため, 対象者の犯行時年齢および被害者の属性などについての情報は得られなかった。罪種が重複している場合は, 重罪種を主罪として分類した。

本研究は, 倫理的配慮としてA刑務所の決裁を受けており, 倫理上の妥当性を得られている。また, 報告すべき利益相反はない。

IV. 結果

1. 因子分析について

FACES-IIIについては, 研究報告されている2因子(FACE1: 凝集性・FACE2: 適応性)を用いて分析した。BSQとADHD傾向質問紙においては, 全罪種の272名に因子分析(最尤法, Varimax回転)を行った(表1, 2)。分析過程において因子負荷量が0.35以下の項目は削除したが, 重要な項目は例外とした。BSQは「BSQ1: 否定的な自己と見捨てられ感($\alpha=0.86$, 因子寄与率=2.83, 累積寄与率=0.257)」と「BSQ2: 対人関係の不信・困難感($\alpha=0.75$, 因子寄与率=2.21, 累積寄与率=0.458)」と命名し, ADHDは「ADHD1: 秩序行動・自信の欠如($\alpha=0.83$, 因子寄与率=2.58, 累積寄与率=0.215)」と「ADHD2: 衝動性と不安定な感情($\alpha=0.71$, 因子寄与率=2.30, 累積寄与率=

0.407)」と命名した。それぞれの2因子ともに高い信頼係数が得られた(以下, FACE1などの略称で記す)。

2. 女子受刑者の因子による相関関係

分析対象者全体と各罪種それぞれにおいて, 家族機能・BPD・ADHD傾向の各因子の相関関係を算出, 表3~5に示した。

3. 女子受刑者の家族機能の高低差からみるBPD傾向・ADHD傾向の比較

家族機能(家族機能総合, FACE1, FACE2)の高低により, BPD傾向(BSQ総合, BSQ1, 2)とADHD傾向(ADHD総合, ADHD1, 2)の各因子得点に差異がみられるかを比較するため, 各罪種別に t 検定を行った(家族機能の平均点を基準に高低群に分類し, 高=高群平均得点, 低=低群平均得点とした)。

有意であった結果は, ①「窃盗」における家族機能総合の高低群[高47名, 低35名]では, BSQ1($t(80)=2.77, p=0.007$, 高10.49, 低9.23)・ADHD総合($t(80)=2.34, p=0.002$, 高29.23, 低27.09)・ADHD2($t(80)=2.47, p=0.002$, 高11.89, 低10.83)に, FACE1高低群[高48名, 低34名]では, BSQ総合($t(80)=2.25, p=0.027$, 高33.77, 低30.97)・BSQ1($t(80)=2.67, p=0.009$, 高10.45, 低9.24)・BSQ2($t(80)=1.47, p=0.014$, 高8.13, 低7.53)に, FACE2高低群[高45名, 低37名]では, BSQ総合($t(80)=2.49, p=0.015$, 高34.0, 低30.92)・BSQ1($t(80)=2.62, p=0.010$, 高10.49, 低9.29)・ADHD総合($t(80)=2.13, p=0.036$, 高29.20, 低27.24)の得点に有意差があった。

②「覚醒剤」における家族機能総合の高低群[高41名, 低51名]では, BSQ総合($t(90)=2.59, p=0.011$, 高35.76, 低33.53)・ADHD総合($t(90)=2.54, p=0.013$, 高28.56, 低26.24)・ADHD1($t(90)=2.30, p=0.024$, 高6.98, 低6.39)・ADHD2($t(90)=2.37, p=0.019$, 高11.34, 低10.27)に, FACE1の高低群[高43名, 低49名]では, BSQ総合($t(90)=2.64, p=0.009$, 高35.92, 低33.49)・BSQ1($t(90)=2.22, p=0.029$, 高11.23, 低10.41)・ADHD1($t(90)=2.61, p$

表1 BSQ の因子分析

第一因子<否定的な自己・見捨てられ感>	第一因子	第二因子	共通性
α 係数=0.86			
2. 私の望みに反して、ほとんどの人は私から離れていくだろう.	0.80	0.27	0.72
3. 私は人から必要とされるような人間ではないのだろう.	0.79	0.23	0.69
1. 私の存在は周囲の人から見れば「うっとうしい」のだろう.	0.69	0.27	0.53
18. 私は間違っても「愛すべき人」ではないだろう.	0.56	0.40	0.48
19. 私のことをよく知れば知るほど、人は私を嫌いになるだろう.	0.54	0.43	0.48
8. 私は難しい問題に立ち向かうのは怖いし、それを受けて立つだけの力もないだろう.	0.48	0.17	0.26
第二因子<対人関係の不信・困難感>			
α 係数=0.75			
12. 私は人から親切にされるとかえって気持ちが混乱してしまうので、人と親しくなり過ぎない方がよいだろう.	0.19	0.66	0.47
11. 人と深く関わると必ず傷つくことはわかっているので、私はできるだけ人と距離をとった方がよいだろう.	0.28	0.62	0.47
14. 自分の言いたいことを言うとかえって傷つくので、言わない方がいいだろう.	0.15	0.59	0.37
15. 問題が起きた時は必ずこじれるので、十分警戒した方がよいだろう.	0.24	0.52	0.33
13. ごく親しい人と一緒にいすぎると、私はどういう人間かわからなくなってしまうだろう.	0.21	0.46	0.26
因子寄与	2.83	2.21	
累積寄与率	0.257	0.458	

表2 ADHD の因子分析

第一因子<秩序行動・自信の欠如>	第一因子	第二因子	共通性
α 係数=0.83			
3. 私は人から必要とされる人間ではないのだろう.	0.92	0.03	0.84
17. 自分はダメな人間だといつも感じる.	0.87	0.19	0.79
14. 心もとない不安定感.	0.67	0.52	0.71
2. 秩序だった行動をとれない	0.42	0.12	0.19
第二因子<衝動性と不安定な感情>			
α 係数=0.71			
13. 不必要な心配を際限なくする. 心配の種を自分からあれこれ探す傾向. 実際の危機に対しては注意を払わなかったり軽視したりする.	0.06	0.68	0.47
6. 頭に浮かんできたことを話のタイミングや状況を考えずに口に出してしまう.	0.17	0.41	0.18
15. 気分が揺れやすく、変わりやすい. 特に他人と別れた時や仕事から離れた時に気分が不安定になる (ただし、躁うつ病やうつ病ほどはっきりした気分変動ではない).	0.32	0.50	0.36
1. 実力を発揮できていない. 目標を達成できていないという感覚. (実際の成果にもかかわらず)	0.18	0.49	0.27
9. すぐに気が散る, 注意の集中が難しい. 読書や会話の最中にはほかのことを考え, 上の空になる (時には異常に集中することがある).	0.25	0.45	0.26
7. 頻繁に強い刺激を求める.	-0.13	0.41	0.18
5. 多くの計画を同時に進めるが, 大部分は最後までやり遂げられない.	0.24	0.36	0.19
因子寄与	2.58	2.30	
累積寄与率	0.215	0.407	

表3 各因子の相関係数(全体と窃盗)

	(全体)	自己否定 見捨てられ	対人関係 不信・困難	秩序・自信 欠如	衝動性・ 不安定感	家族凝集	家族適応	(窃盗)	自己否定 見捨てられ	対人関係 不信・困難	秩序・自信 欠如	衝動性・ 不安定感	家族凝集	家族適応
自己否定・見捨てられ			0.533**	0.705**	0.379**	0.327**	0.289**			0.615**	0.637**	0.439**	0.281*	0.268*
対人関係不信・困難				0.530**	0.454**	0.266**	0.239**				0.567**	0.432**	0.233*	0.172
秩序・自信欠如					0.565**	0.310**	0.270**					0.637**	0.189	0.182
衝動性・不安定感						0.212**	0.252**						0.191	0.222*
家族凝集							0.868**							0.884**
(全体) $n = 272$, (窃盗) $n = 82$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$ (両側)														

表4 各因子の相関係数(覚醒剤と殺人)

	(覚醒剤)	自己否定 見捨てられ	対人関係 不信・困難	秩序・自信 欠如	衝動性・ 不安定感	家族凝集	家族適応	(殺人)	自己否定 見捨てられ	対人関係 不信・困難	秩序・自信 欠如	衝動性・ 不安定感	家族凝集	家族適応
自己否定・見捨てられ			0.387**	0.571**	0.387**	0.234*	0.211*			0.577**	0.814**	0.410**	0.551**	0.475**
対人関係不信・困難				0.432**	0.431**	0.207*	0.239*				0.496**	0.409**	0.365*	0.398**
秩序・自信欠如					0.563**	0.276**	0.239*					0.487**	0.420**	0.348*
衝動性・不安定感						0.230*	0.277**						0.045	0.144
家族凝集							0.845**							0.877**
(覚醒剤) $n = 92$, (殺人) $n = 45$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$ (両側)														

表5 各因子の相関係数(詐欺と粗暴・その他)

	(詐欺)	自己否定 見捨てられ	対人関係 不信・困難	秩序・自信 欠如	衝動性・ 不安定感	家族凝集	家族適応	(粗暴・他)	自己否定 見捨てられ	対人関係 不信・困難	秩序・自信 欠如	衝動性・ 不安定感	家族凝集	家族適応
自己否定・見捨てられ			0.796**	0.882**	0.512**	0.387*	0.318			0.410	0.829**	0.687**	0.537**	0.503*
対人関係不信・困難				0.767**	0.615**	0.312	0.214				0.566**	0.719**	0.449*	0.405
秩序・自信欠如					0.663**	0.481**	0.417*					0.802**	0.411	0.331
衝動性・不安定感						0.178	0.212						0.564**	0.553**
家族凝集							0.914*							0.740**
(詐欺) $n = 31$, (粗暴・その他) $n = 22$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$ (両側)														

=0.011, 高 7.00, 低 6.34) に, FACE2 の高低群 [高 39 名, 低 53 名] では, BSQ 総合 ($t(90)=2.78$, $p=0.007$, 高 35.92, 低 33.49)・BSQ1($t(90)=2.39$, $p=0.019$, 高 11.31, 低 10.41)・ADHD 総合 ($t(90)=2.85$, $p=0.007$, 高 28.77, 低 26.17)・ADHD1($t(90)=2.56$, $p=0.012$, 高 7.03, 低 6.37)・ADHD2($t(90)=2.87$, $p=0.005$, 高 11.49, 低 10.21) の得点に有意差があった.

③「殺人」における家族機能総合の高低群 [高 23 名, 低 22 名] では, BSQ 総合 ($t(43)=3.04$, $p<0.001$, 高 33.39, 低 28.86)・BSQ1($t(43)=3.01$, $p=0.004$, 高 9.96, 低 8.18)・BSQ2($t(43)=2.82$, $p=0.007$, 高 8.57, 低 7.32) に, FACE1 の高低群 [高 23 名, 低 22 名] では, BSQ 総合 ($t(43)=2.76$, $p=0.008$, 高 33.22, 低 29.05)・BSQ1($t(43)=3.01$, $p=0.004$, 高 9.95, 低 8.19)・BSQ2($t(43)=2.14$, $p=0.037$, 高 8.44, 低 7.45), ADHD1($t(43)=2.58$, $p=0.013$, 高 6.61, 低 5.50), FACE2 の高低群 [高 21 名, 低 24 名] では, BSQ 総合 ($t(43)=3.66$, $p<0.001$, 高 34.00, 低 28.71)・BSQ1($t(43)=3.63$, $p<0.001$, 高 10.19, 低 8.13)・BSQ2($t(43)=3.05$, $p=0.004$, 高 8.67, 低 7.33)・ADHD1($t(43)=2.16$, $p=0.037$, 高 6.57, 低 5.62) の得点に有意差があった.

④「詐欺」における家族機能総合の高低群 [高 17 名, 低 14 名] では, BSQ 総合 ($t(29)=2.29$, $p=0.029$, 高 36.00, 低 31.54)・BSQ1($t(29)=2.40$, $p=0.023$, 高 11.28, 低 9.62)・ADHD 総合 ($t(29)=2.06$, $p=0.048$, 高 28.94, 低 25.77)・ADHD1($t(29)=3.47$, $p=0.002$, 高 7.28, 低 5.85) に, FACE1 の高低群 [高 18 名, 低 13 名] では, BSQ 総合 ($t(29)=2.81$, $p=0.009$, 高 36.33, 低 31.77)・BSQ1($t(29)=3.15$, $p=0.004$, 高 11.44, 低 9.38)・ADHD 総合 ($t(29)=2.16$, $p=0.039$, 高 29.00, 低 25.65)・ADHD1($t(29)=3.95$, $p<0.001$, 高 7.33, 低 5.77) の得点に有意差があったが, FACE2 の高低群では, 全ての因子に有意差がなかった.

⑤「粗暴・その他」における家族機能総合の高低群 [高 11 名, 低 11 名] では, BSQ 総合 ($t(20)=3.48$, $p=0.002$, 高 35.82, 低 29.36)・BSQ1($t(20)=3.53$, $p=0.002$, 高 10.82, 低 8.18)・BSQ2($t(20)=2.31$, $p=$

0.032, 高 8.82, 低 7.45)・ADHD 総合 ($t(20)=3.48$, $p=0.002$, 高 30.09, 低 29.36)・ADHD1($t(20)=3.08$, $p=0.006$, 高 6.91, 低 5.27)・ADHD2($t(20)=2.32$, $p=0.004$, 高 12.55, 低 10.00), FACE1 の高低群 [高 11 名, 低 11 名] では, BSQ1($t(20)=2.52$, $p=0.022$, 高 10.54, 低 8.45)・ADHD 総合 ($t(20)=2.27$, $p=0.034$, 高 29.45, 低 25.00)・ADHD1($t(20)=2.19$, $p=0.039$, 高 6.73, 低 5.45)・ADHD2($t(20)=2.59$, $p=0.01$, 高 12.36, 低 10.18) に, FACE2 の高低群 [高 12 名, 低 10 名] では, BSQ 総合 ($t(20)=2.15$, $p=0.044$, 高 34.67, 低 30.10) のみ有意差があった.

4. 女子受刑者の年齢による特徴

各罪種の年齢を平均により高低群に分けて, 家族機能総合・BSQ 総合・ADHD 総合得点の年齢による得点の差異をみるため t 検定を行った.

①窃盗 [高 48 名, 低 34 名] においては, 家族機能総合 ($t(80)=2.55$, $p=0.012$, 高 67.02, 低 56.29)・ADHD 総合 ($t(80)=2.13$, $p=0.037$, 高 29.21, 低 27.27) に有意差がみられた. ②覚醒剤 [高 39 名, 低 53 名] では, ADHD 総合 ($t(90)=3.69$, $p<0.001$, 高 29.28, 低 26.02) のみに年齢による有意差がみられた. ③殺人 [高 25 名, 低 20 名] は, 家族機能総合 ($t(43)=3.01$, $p=0.004$, 高 62.52, 低 46.96)・BSQ 総合 ($t(43)=2.52$, $p=0.016$, 高 33.24, 低 29.38)・ADHD 総合 ($t(43)=2.58$, $p=0.015$, 高 29.43, 低 26.63) 全てに年齢による有意差が示されていた. ④詐欺 [高 19 名, 低 12 名] では, 家族機能総合 ($t(29)=2.69$, $p=0.011$, 高 75.25, 低 56.43)・BSQ 総合 ($t(29)=2.55$, $p=0.016$, 高 36.69, 低 31.94)・ADHD 総合 ($t(29)=2.65$, $p=0.013$, 高 29.75, 低 25.88) 全てに年齢による有意差が示されていた. ⑤粗暴・その他 [高 13 名, 低 9 名] では, 家族機能総合 ($t(20)=2.25$, $p=0.035$, 高 68.18, 低 49.36) のみに年齢による有意差がみられた.

5. 女子受刑者における家族機能と ADHD 傾向が BPD 傾向に与える影響

全罪種 (272 名)・殺人以外の罪種 (227 名)・殺人

表6 殺人と殺人以外の罪種の重回帰分析

独立・従属変数	殺人			殺人以外の罪種		
	標準偏回帰係数 (<i>p</i> 値)	<i>F</i> 値	<i>R</i> ² (<i>p</i> 値)	標準偏回帰係数 (<i>p</i> 値)	<i>F</i> 値	<i>R</i> ² (<i>p</i> 値)
自己否定・見捨てられ感 (従属変数)						
家族機能総合	0.103 (<i>p</i> =0.002)	26.56	0.558 (<i>p</i> <0.001)	0.116 (<i>p</i> <0.001)	63.56	0.373 (<i>p</i> <0.001)
ADHD 総合	0.785 (<i>p</i> <0.001)			0.557 (<i>p</i> <0.001)		
家族凝集性	0.048 (<i>p</i> =0.007)	52.84	0.715 (<i>p</i> <0.001)	0.930 (<i>p</i> =0.070)	95.42	0.460 (<i>p</i> <0.001)
秩序行動・自信の欠如	0.994 (<i>p</i> <0.001)			0.646 (<i>p</i> <0.001)		
家族凝集性	0.534 (<i>p</i> <0.001)	17.36	0.452 (<i>p</i> <0.001)	0.032 (<i>p</i> =0.003)	27.18	0.195 (<i>p</i> <0.001)
衝動性・不安定な感情	0.385 (<i>p</i> =0.002)			0.344 (<i>p</i> <0.001)		
家族適応性	0.218 (<i>p</i> =0.019)	49.92	0.703 (<i>p</i> <0.001)	0.018 (<i>p</i> =0.109)	94.76	0.458 (<i>p</i> <0.001)
秩序行動・自信の欠如	0.737 (<i>p</i> <0.001)			10.01 (<i>p</i> <0.001)		
家族適応性	0.108 (<i>p</i> =0.002)	11.04	0.344 (<i>p</i> <0.001)	0.139 (<i>p</i> =0.027)	24.88	0.182 (<i>p</i> <0.001)
衝動性・不安定な感情	0.391 (<i>p</i> =0.008)			0.366 (<i>p</i> <0.001)		
対人関係の不信・困難感 (従属変数)						
家族凝集性	0.027 (<i>p</i> =0.194)	7.98	0.275 (<i>p</i> =0.001)	0.985 (<i>p</i> =0.091)	48.68	0.303 (<i>p</i> <0.001)
秩序行動・自信の欠如	0.433 (<i>p</i> =0.006)			0.514 (<i>p</i> <0.001)		
家族凝集性	0.347 (<i>p</i> =0.011)	8.48	0.287 (<i>p</i> <0.001)	0.019 (<i>p</i> =0.027)	34.04	0.233 (<i>p</i> <0.001)
衝動性・不安定な感情	0.393 (<i>p</i> =0.004)			0.338 (<i>p</i> <0.001)		
家族適応性	0.256 (<i>p</i> =0.069)	9.13	0.303 (<i>p</i> <0.001)	0.824 (<i>p</i> =0.154)	48.09	0.300 (<i>p</i> <0.001)
秩序行動・自信の欠如	0.406 (<i>p</i> =0.005)			0.522 (<i>p</i> <0.001)		
家族適応性	0.345 (<i>p</i> =0.012)	8.34	0.345 (<i>p</i> <0.001)	0.009 (<i>p</i> =0.153)	33.20	0.223 (<i>p</i> <0.001)
衝動性・不安定な感情	0.359 (<i>p</i> <0.001)			0.441 (<i>p</i> <0.001)		

表7 女子受刑者全体の重回帰分析

独立・従属変数	標準偏回帰係数 (<i>p</i> 値)	<i>F</i> 値	<i>R</i> ² (<i>p</i> 値)
BSQ 総合			
家族総合	0.540 (<i>p</i> <0.001)	80.16	0.373 (<i>p</i> <0.001)
ADHD 総合	0.169 (<i>p</i> =0.001)		

(45名)それぞれの女子受刑者において、家族機能とADHD傾向がBPD傾向に影響するかを、独立変数を家族機能(凝集性、適応性)、ADHD傾向(秩序行動・自信の欠如、衝動性と不安定な感情)とし、従属変数をBPD傾向(自己否定と見捨てられ感、対人関係の不信・困難感)として、重回帰分析により検討した。結果は、表6,7に示した。

V. 考察

1. 女子受刑者全体について

女子受刑者全体の傾向では、家族の機能不全の有無と、BPD・ADHD傾向は関連し、家族の機能の状態により、感情の安定性や自己・他者肯定感に差異が生じ、秩序的行動・衝動性・対人関係に影響を及ぼすと

推測された。また、家族凝集性においては、全ての罪種がBPDの「否定的な自己と見捨てられ感」と関連し、家族間の情緒的絆の弱さにより見捨てられ感が高まり、自己を否定してしまうことが各犯罪に至る背景要因の1つと考えられた。各罪種における年齢の高低による比較では、「家族機能が良好に機能していない」、「BPD傾向が高い」、「ADHD傾向が高い」のいずれかの問題は年齢が低い方が高く、年齢が高いとそれらが問題となる傾向は低かった。特に殺人と詐欺は、全ての傾向が年齢により差異が生じていた。よって、年齢が低いと未熟なため、これらの問題が重なることは犯罪に至る要因となる可能性が考えられ、一方、年齢が高いとこれらの問題は大きく犯罪要因として影響せず、別な要因の可能性が推測された。年齢が高くなると、身体的エネルギーの衰えから、BPD傾向やADHD傾向が低くなることが考えられることや、更年期における心身の影響や将来に対する時間的展望の狭まりなどの別な問題があること²³⁾などの理由から、年齢による各傾向の差異が生じると推測された。

2. 殺人と他罪種との比較および背景要因への推察

各罪種の特徴について述べると、「窃盗」では、家族の情緒的絆・適応性が不良であると、自己否定し見捨てられ感が強くなることが示唆された。また、家族が適応的に機能していないと、ADHD 傾向が高まることに関連することが窃盗の背景要因と考えられた。「覚せい剤」では、家族の情緒的絆・適応性が不良であると、自己否定し見捨てられ感が強くなること、秩序行動や自信が欠如することが示されていた。さらに、家族が適応的でないと、衝動性や感情が不安定になることが覚醒剤の背景要因と推測された。次に「詐欺」では、家族の適応性が不良であることと BPD・ADHD 傾向は関連性がないことが示唆された。家族の情緒的絆が不良であると、自己否定し見捨てられ感が強くなり、秩序行動・自信が欠如して不安定な感情で衝動的になることが詐欺の背景要因と考えられた。「粗暴・その他」では、家族の適応性が不良であることと BPD 傾向にはやや関連がみられたが、ADHD 傾向には関連していないことが示唆された。一方、家族の情緒的絆が不良であると、自己否定し見捨てられ感が強くなり、衝動的で不安定な感情や秩序行動がとれず自信がなくなることが、粗暴・その他の背景要因と考えられた。

殺人においては、家族の情緒的絆と適応性のどちらが不良でも、自己否定し見捨てられ感が強く、対人関係に不信と困難感を持ち、秩序行動がとれず自信がないことが示されていた。殺人と他罪種の差異は、殺人は家族機能が不良であると対人関係に問題が生じる傾向が他罪種より大きいことであった。これらを鑑みると、窃盗・放火・強盗は、他者に関係はするが物質に向けられた犯罪行動である。また、覚せい剤は主に自己に向けた犯罪行動である。他者を死に至らしめるという犯罪行動である殺人に、他者への不信感や対人関係の困難さが他罪種よりも大きいことは、もっともなことであると言える。

次に、ADHD 傾向であり家族機能が不良であることが、BPD 傾向になることに影響を与えているかを検討すると、女子受刑者全体においては、ADHD 傾

向との関連は低かったが、その両者が BPD 傾向に影響を与えていることが示されていた。家族に情緒的絆や適応性がないという家族機能の不良な状態で ADHD 傾向にある場合、その障害の特性から、失敗経験も多く情緒が不安定になりやすく、それを支える家族が機能していないために、BPD 傾向である「自己否定し見捨てられ感を持ち、他者を信じられず対人関係に困難が生じる」ことが言える。そのような一連の流れが、犯罪行動の背景要因になっていると推察される。

一方、殺人と、殺人以外の罪種に大別して同様に検討すると、殺人以外の罪種では、家族機能の不良との関連は低かったが、その両者が BPD 傾向に影響を与えていることが示されていた。しかしながら、それをさらに因子別に詳しく検討すると、家族の情緒的絆と適応性との関連は低く、ADHD 傾向においては、「不安定な感情で衝動的である」ことよりも、「秩序行動がとれず自信がない」ことが BPD 傾向の「自己否定し見捨てられ感を持ち、他者を信じられず対人関係に困難が生じる」ことに影響を与えていた。

殺人においては、ADHD 傾向の「衝動性と不安定な感情」があり、家族の情緒的絆が不良である場合、BPD 傾向の「自己否定し見捨てられ感を持ち、他者を信じられず対人関係に困難が生じる」ことが示されていた。また、ADHD 傾向の「秩序行動がとれず自信がない」と、家族の適応性が不良である場合には、BPD 傾向の「自己否定し見捨てられ感」に影響していた。さらに、ADHD 傾向の「衝動性と不安定な感情」を持ち、家族の適応性が不良である場合は、BPD 傾向の「他者を信じられず対人関係に困難が生じる」ことに影響していた。

これらのことから、本研究における女子殺人の特徴は、他罪種よりも家族機能の情緒的な絆・適応性が不良であることが、ADHD 傾向と BPD 傾向に影響を与えていることであった。

殺人についての研究では、男子の殺人は女子よりも衝動的で暴力的な面があるとされ、男子少年殺人の類型を試みた近藤²⁴⁾は、「“外在化型”は、意志欠如傾

向で規範意識に乏しく、不快な感情を抑えられず疑い深さが顕著である。集団で強盗や不良集団の抗争中で殺人に至る者が多い」、「内在化型」は、家族や少年自身に問題があり、家庭内暴力・不登校が生じている。対人面の不適応や抑制過剰型であることから、親族殺が多いが、一方で見知らぬ人に凶悪事件を起こす、「遅発型」は、適応的に振る舞っていたが、周囲からの圧力でストレスが高まり、耐え切れず我慢から逃れる手段として殺人に至る者が多い」と、家族からの影響を受けている場合と、それ以外の要因を報告し類型化がなされている。

一方、女子の殺人は、親族や知り合いなどの身近な者が被害者となることが多いため、身近な者との関係性や経済的・社会的な問題など、立場の弱さが関連しているとされてきた。しかし、少数例ではあるが、女子にも金銭などを目的とする利欲的な殺人もある。保険金をかけて身内や交際相手を殺害したり、代理ミュンヒハウゼン症候群のように、わが子や患者を故意に病気となるような状態にさせて、自ら献身的に看護をして他者から賞賛を得ようとするあまりに殺害に至ることもある²⁵⁾。また、平成16年に佐世保で起きた小6女子の同級生殺人事件においては、裁判所の審判決定要旨にある事件に関する情報をコンピタンス分析をした研究が報告され、「被害児童による交換ノートやインターネット上での否定的表現（居場所への侵入）に対して怒りを募らせて攻撃性を高め、確定的な殺意を抱き、計画的に殺害行動に及んだという直接動機を“不適切な問題解決”とみなすならば、その背景に“友好性の欠如および未発達やゆがみ”、“言語理解・表現の未発達・未学習”、“自己開示性の未発達や歪み”等がある」との知見を得ている²⁶⁾。このことから、発達や人格における問題があることが推測され、特に発達の問題は生涯において持続する問題である。今後は、未成年を含む女子の殺人事犯研究においても、発達や人格の問題を研究することが重要と考えられる。

VI. 結語

女子殺人に少しずつ変化が生じており、家族機能や

ライフスタイルに影響を受けるという従来の背景要因だけでは説明しづらくなっている。親族殺人が多いとされる女子殺人にも、利欲的な少数例を鑑みた視点に立つ類型化は必要であろう。

本研究では、「他者への不信感と対人関係の困難感」が女子殺人事犯に大きく影響していることが明らかとなった。また、ADHD傾向の「秩序行動がとれず自信がなく、衝動的で不安定な感情」を持ち、家族の情緒的絆と適応性が不良である場合に、BPD傾向の「自己否定し見捨てられ感を持ち、他者を信じられず対人関係に困難感」を生じることが他罪種よりも顕著であることが示唆された。

このことから、殺人において、ADHD傾向の秩序的な行動がとれず自信がないことや、衝動的で不安定な感情を持つ場合は、他罪種よりも家族成員に対して家族に絆という信頼関係があるかどうかに関敏感であり、家族のどのような機能が欠如していても、自己や他者を否定的にとらえて見捨てられ感を持つことが考えられた。それゆえ、他者への不信が生じて対人関係が困難となり、殺害に至ってしまうことが女子殺人事犯の特徴であると推察される。しかしながら、家族機能・ADHD傾向・BPD傾向それぞれに、年齢の高低による差異がみられた。今後において、年齢による背景要因の差異や家族機能が良好であると認識している場合の殺人事犯についても検討することを試みたい。

謝辞

本研究においては、福島学院大学の星野仁彦先生、高等教育総合研究所の須田誠先生、東京都健康長寿医療センター研究所の村山陽先生・竹内瑠美先生の皆様に多大なご協力をいただきました。深い感謝とともに厚く御礼申し上げます。

文献

- 1) 無差別殺傷事件に関する研究. 法務総合研究所研究部報, 2013: 50
- 2) 岩井宣子. 平成25年度版犯罪白書特集「女子の犯罪・非行」を読んで. 罪と罰: 日本刑事政策研究会. 刑事政策関係刊行物, 2014
- 3) 中村正. 「愛情と暴力」—親密な関係性という相互作用

- から立ち上がる親族間殺人と暴力— 現代の社会病理 2008; (23): 59-68
- 4) 広瀬勝世. 女子殺人者の精神医学的研究—50例の女子殺人受刑者の観察とその犯罪予後について— 精神神経学雑誌 1958; 60(12): 64-76.
 - 5) 久我滯子. 受刑者の生活歴からみた女性犯罪. 犯罪社会学研究 1977; (2): 106-118
 - 6) 岩井宣子. 平成の親族間殺人. 現代の社会病理 2008; (23): 47-58.
 - 7) Swanson DW, Bohnert PJ, Smith JA. The Paranoid. Boston: Little Brown & Company, 1970
 - 8) Gottfredson MR, Hirschi T. A General Theory of Crime. Stanford University Press, 1990
 - 9) Gunderson JG, Englund DW. Characterizing the families of borderlines: a review of the literature. Psychiatr. Clin. North Am. 1981; 4: 159-168
 - 10) Bezirganian S, Cohen P, Brook JS. The impact of mother-child interaction on the development of borderline personality disorder. Am. J. Psychiatry 1993; 150: 1836-1842
 - 11) Johnson JG, Cohen P, Brown J, et al. Childhood maltreatment increases risk for personality disorders during early adulthood. Arch. Gen. Psychiatry 1999; 56: 600-606
 - 12) 松本俊彦. 第3章 犯罪非行の個別的要因①パーソナリティ要因. 犯罪・非行心理学. 東京: 有斐閣, 2007: 53-54
 - 13) 大村一史. ADHDにおける衝動性への行動— 遺伝的アプローチ. 山形大学紀要(教育科学) 2007; 14(2): 113-122
 - 14) 友田明美, 山崎未花, ハツ賀千穂ら. fMRIを用いた注意欠陥多動性障害(ADHD)における報酬系の神経基盤に関する検討. 「脳発達プロジェクト研究」福井大学生命科学複合研究教育センター平成23年度研究費助成事業 2013
 - 15) 斎藤万比古. 注意欠陥/多動性障害(AD/HD)の診断・治療ガイドラインについて. 精神神経学雑誌 2005; 107: 167-179
 - 16) 宮本信也. 注意欠陥・多動障害. 小児の精神と神経 2000; 40(4): 255-264
 - 17) 杉山登志郎. 非行と発達障害. 臨床心理学 2002; 2(2): 210-219
 - 18) 奥山真紀子. 不適切な養育(虐待)と行動障害. 小児の精神と神経 2000; 40(4): 279-285
 - 19) 木村祐子. 少年非行と障害の関連性の語られ方—DSM型診断における解釈の特徴と限界—. 人間文化創成科学論叢 2008; 11: 227-236
 - 20) 立山慶一. 家族機能測定尺度(FACES III)邦訳版の信頼性・妥当性に関する一研究. 創価大学大学院紀要 2006; 28: 285-305
 - 21) 井沢功一朗. ボーダーライン・スキーマ質問紙(BSQ)の作成. 心理臨床学研究 2005; 23(3): 273-282
 - 22) Hallowell EM, Ratey JJ. Driven to Distraction. Pantheon Books, 1994: 73-76
 - 23) 斎藤高雅. 第15章 ライフサイクル論: 4成人期・中年期. 放送大学大学院教材 臨床心理学特論. 国立印刷局, 2007: 196-199
 - 24) 近藤日出夫. 男子少年による殺人. 犯罪社会学研究 2009; (34): 134-150
 - 25) 越智啓太. 第2章 女性による連続殺人. ケースで学ぶ犯罪心理学. 京都: 北大路書房, 2013: 19-25
 - 26) 勝俣暎史, 蒔田桂, 壁谷真由美ら. 佐世保市小6女児同級生殺害事件に関する分析. コンピタンス教育心理学的視点から. 日本教育心理学会総会発表論文集 2007; 49: 501